

2023年3月期（2022年度）第3四半期連結決算 電話会議 内容説明スクリプト

I. 全般概況

本日発表いたしました当社2023年3月期第3四半期決算の概要についてご説明します。決算短信の表紙サマリーをご覧ください。

1. 2023年3月期 第3四半期連結決算 業績概要

1) 当年度第3四半期連結累計期間の経営成績

- ① 売上高 10,757 億円、前年同期比+1,532 億円の増収
(売上総利益 2,262 億円、前年同期比+453 億円の増益)
 - ② 税引前利益 2,186 億円、前年同期比+232 億円の増益
 - ③ 四半期利益 1,608 億円、前年同期比▲201 億円の減益
 - ④ 親会社の所有者に帰属する四半期利益 1,528 億円、前年同期比▲173 億円の減益
- と、前年同期に対して増収、税引前利益では増益となりました。

2) 当年度第3四半期累計連結決算の概況

当年度第3四半期累計連結決算の概況をご説明いたします。決算短信添付資料の2ページをご覧ください。

《為替相場、金属価格》

為替相場は、日米の金融政策の相違による金利差拡大や日本の貿易赤字拡大などにより、円がドルに対して大幅に下落しました。その後、米国における利上げ幅の縮小及び日本における長期金利の変動許容幅拡大に伴う金利差縮小などにより上昇に転じたものの、平均為替レートは前年同期間と比べ大幅な円安となりました。

銅価格につきましては、中国の経済活動の停滞による需要減少への懸念などにより下落し、その後持ち直し小幅に上昇したものの、前年同期間を下回りました。ニッケル価格は、前連結会計年度末にかけて上昇した後、景気減速などにより急落しましたが、その後底堅い需要に支えられ堅調に推移し、前年同期間を上回りました。金価格は米国の相次ぐ政策金利引き上げなどにより下落傾向が継続し、利上げ幅縮小などにより持ち直す動きが見られたものの、前年同期間を下回りました。

《売上高、損益》

当第3四半期連結累計期間の連結売上高は、大幅な円安、ニッケル平均価格の上昇、車載用電池向け部材の増販などにより、前年同期間に比べ1,532億円増加し、1兆757億円となりました。連結税引前四半期利益は、持分法による投資利益の減少などがあったものの、増収に加え円安などによる金融収益の好転などにより、前年同期間に比べ232億円増加し、2,186億円となりました。

親会社の所有者に帰属する四半期利益は、連結税引前四半期利益が増加したものの、シエラゴルダ銅鉱山関連の繰延税金資産を計上した前年同期間と比較して法人所得税費用が増加したため、前年同期間に比べ173億円減少し、1,528億円となりました。

3) トピックス

当期決算におけるトピックスについてご説明します。生産量については、決算補足説明資料の7ページをご参照ください。

① 海外銅鉱山

《モレンシー》

生産量は、新型コロナウイルス感染症対策として実施していた選鉱場の操業度低下策の終了などにより、前年同期間を上回る 304 千 t となりました。

《セロ・ベルデ》

生産量は、給鉱品位の上昇や選鉱場の稼働率上昇などにより前年同期間を上回る 326 千 t となりました。

② CBNC (コーラルベイ)

生産量は、悪天候の影響による減産があったものの、定期メンテナンス日数の短縮に努め、前年同期間並みの 13.1 千 t となりました。

③ タガニート HPAL

生産量は、設備トラブルによる減産があったものの、前年同期間を上回る 22.8 千 t となりました。

④ 材料事業

中国における電子部品向け部材の需要が縮小したものの、脱炭素化を背景に需要が堅調である車載用電池向け部材の増販などにより、売上高は前年同期間を 379 億円上回る 2,416 億円となりました。

2. 2023 年 3 月期 通期連結業績予想

昨年 11 月に通期の連結業績予想を見直し公表しておりますが、今回も年度累計業績予想の見直しを行いました。決算短信の表紙サマリー下段、および決算補足説明資料の 1 ページ下段をご覧ください。

1) 売上高および損益

2023 年 3 月期の通期の連結業績予想は、

- ① 売上高 1 兆 4,050 億円、11 月予想比+280 億円の増収
- ② 税引前利益 2,280 億円、11 月予想比+270 億円の増益
- ③ 親会社の所有者に帰属する当期利益 1,580 億円、11 月予想比+210 億円の増益

業績予想の前提となる金属価格および為替レートは、決算短信添付資料の 5 ページならびに決算補足説明資料の 1 ページ下段に記載のとおりです。金属価格については、銅およびニッケル、金は 11 月予想を上回ることを見込んでおり、平均為替レートは 11 月予想に対して円高で予想しております。

2) トピックス

業績予想におけるトピックスについて概況をご説明します。生産量については、決算補足説明資料の 7 ページをご参照ください。

① 菱刈鉱山

21 中計で発表したとおり、2022 年度からマインライフ延長に向けた持続可能な生産体制へ移行するため、年間の金販売量は 4.4 トンで計画しており、第 3 四半期累計期間の販売実績は 3.4 トンとなりました。

なお、1 月 23 日公表のとおり、鉱石の積み込み・運搬を行う地下ロードホールダンプの自動走行と遠隔操作システムを導入し、自動運転の本格稼働に向けた現場での稼働試験を開始いたしました。こうした取り組みを通じて、安全性の向上やコスト削減、働き方改革等を実現し、サステナビリティを重視した長期安定操業体制の確立に努めてまいります。

② 海外銅鉱山

《モレンシー》

設備トラブルの影響から、11 月計画時の年間生産量から若干減産となりますが、概ね順調な操業を続けています。

《セロ・ベルデ》

一時的な品位の低下傾向を処理量増でカバーする操業は順調に推移し、年間の生産量は 11 月の計画どおりとなる見込みです。

《カンデラリア》

オホステルサラド鉱山付近に発生した陥没孔の影響等もあり、11 月の計画時の年間生産量を若干下回りますが、概ね順調な操業を続けています。

③ CBNC (コーラルベイ)

下期は概ね順調に操業を続けているものの、一部設備トラブルの影響により、11 月の計画時の年間生産量を若干下回る見込みです。

④ タガニート HPAL

下期は概ね順調に操業を続けているものの、年末の豪雨の影響により、11 月の計画時の年間生産量を若干下回る見込みです。

3. 配当

配当についてご説明いたします。

決算短信の表紙サマリー、および本日公表しました「2023 年 3 月期 (第 98 期) 剰余金の期末配当予想の修正に関するお知らせ」をご覧ください。

今回、通期連結業績予想を修正したことにより、当社の 2021 年中期経営計画 (対象期間：2022～2024 年度) における利益配分に関する方針「剰余金の配当は連結配当性向原則 35%以上とする」に基づき、期末の配当予想の見直しを行いました。

その結果、1 株当たりの期末配当の予想は、前回発表予想の 1 株あたり 85 円に対して 27 円増配し、112 円に修正することといたします。

Ⅱ. 売上総利益、セグメント利益の内訳他の詳細

ここからは、決算補足説明資料について、ポイントとなる部分のみご説明いたします。

1. 1 ページ 決算・予想比較

1) 2022 年度第 3 四半期累計決算 vs 2021 年度第 3 四半期累計決算

1 ページ目上段の表が当期第 3 四半期累計決算の前年同期比較となります。

表の脚注の記載【比較 1：2022 年度 3Q 累計決算 vs 2021 年度 3Q 累計決算 ①－②】の税引前利益増減分析をご覧ください。

税引前利益+232 億円増益の要因のうち、相場要因好転+711 億円以外の主な項目をご説明いたします。コスト差については、エネルギー価格等の高騰を受けた国内・外の主要拠点での悪化により、▲381 億円の悪化となりました。Sierra Gorda 利益▲82 億円は一過性要因で、昨年発生した利益が剥落するためです。その他の▲92 億円には、相場要因や材料に含まれない持分法会社の損益増減、副産品の影響など様々な要因が含まれています。

2) 2022 年度通期業績予想 (2 月予想) vs (11 月予想)

2022 年度通期業績予想について、今回見直した 2 月予想と前回 11 月公表予想との比較について、下段の表と表の下にある脚注記載【比較 2：2022 年度予想 (2 月) vs 2022 年度予想 (11 月) ⑤－⑥】の税引前利益増減分析をご覧ください。

税引前利益+270 億円増益の要因のうち、相場要因による好転+205 億円以外の主な項目をご説明します。コスト差では▲50 億円の悪化を予想しています。材料事業については、金属価格上昇により電池材料を中心に+50 億円の増益を予想しています。その他の+66 億円は、相場要因や材料に含まれない持分法会社の損益増減や研究開発費の期ズレなど様々な要因が含まれています。

3) 2022 年度下期予想 (2 月予想) vs 2022 年度 2Q 累計決算

2022 年度の今回見直した下期予想と 2Q 累計決算の比較について、下段の表と表の下にある脚注記載【比較 3：下期予想 (2 月) vs 2Q 累計決算 ④－①】の税引前利益増減分析をご覧ください。

税引前利益▲1,102 億円減益の要因のうち、相場要因による悪化▲465 億円以外の主な項目をご説明します。コスト差では▲94 億円の悪化を予想しています。材料事業については、電池材料の受払差が上期にプラスに出た反動による悪化に加えて、機能性材料では電子部品需要の減少と在庫調整の長期化の影響を受け、▲184 億円の悪化を予想しています。その他の▲85 億円は、相場要因や材料に含まれない持分法会社の損益増減など様々な要因が含まれています。

2. 3 ページ セグメント別対前年実績比較（売上総利益増減）

3 ページ セグメント別の対前年実績比較をご覧ください。

資源セグメントの売上総利益は 557 億円と▲120 億円の減益となりました。ページ中央の増減説明に記載のとおり、菱刈鉱山、海外銅鉱山ともに円安による為替差の好転はあったものの、コスト単価差の悪化や価格の下落に加えて、菱刈鉱山での減産による数量差の影響が出ています。

製錬セグメントの売上総利益は 1,338 億円と+521 億円の増益となりました。下段の増減説明のとおり、銅系で+274 億円、ニッケル系で+159 億円の好転です。コスト単価差は銅系、ニッケル系ともにエネルギー価格等の上昇の影響を受け減益要因となりました。一方で、価格条件差がニッケル系の価格上昇により大きく好転していることに加え、在庫評価では、銅系では円安の影響、ニッケル系では価格上昇と円安の効果により大きく好転しています。

3. 4 ページ セグメント別対前年実績比較（材料事業の製品群別売上高）

4 ページ上段、材料事業の製品群別売上高です。電池材料については、堅調な需要と金属価格上昇により+526 億円増収の 1,490 億円となりました。その他機能性材料等については、中国の都市封鎖等に伴う電子部品向けの需要減により、▲147 億円減収の 926 億円となりました。

4. 4 ページ セグメント別対前年実績比較（持分法投資損益）

4 ページ中央、当期の持分法投資損益については、セロ・ベルデ、カンデラリアにおいては数量増加および円安の効果があったものの、金属価格の下落により減益となりました。また、第 2 四半期同様に権益譲渡に伴うシエラゴルドの利益 82 億円の剥落等の影響により、前期比▲162 億円減益の 248 億円となりました。

5. 5 ページ セグメント別業績予想比較 2022 年度予想（2 月）vs（11 月）

5 ページ上段をご覧ください。2022 年度の前回予想（11 月）と今回見直した予想（2 月）のセグメント別比較です。業績予想の数値は 10 億円単位の丸め数字で記載しています。

資源セグメントの売上総利益は 740 億円と+60 億円の増益と予想しています。ページ中央の増減説明に記載のとおり、海外銅鉱山・主にモレンシーは数量減が見込まれるものの、価格の上昇に加え、コスト増が 11 月想定よりも進行しなかったことから増益を予想しています。また、菱刈鉱山は 11 月想定とおりの操業を行っており、価格の上昇により増益を予想しています。

製錬セグメントの売上総利益は 1,470 億円と 30 億円の増益と予想しています。下段の増減説明のとおり、銅系で▲54 億円の減益、ニッケル系は+105 億円の増益を予想しています。銅系では、コスト単価は悪化に加え、為替を円高で想定したことによる在庫評価益の減少を予想しています。ニッケル系では、エネルギー価格等の上昇によるコスト増の影響を受けるものの、価格上昇が条件差および在庫評価で利益の押し上げ要因となり増益の見通しです。その他は、記載のとおり、グループ会社間のセグメント内消去等です。

6. 6 ページ セグメント別通期業績予想比較（材料事業の製品群別売上高）

6 ページ上段、材料事業の製品群別売上高について、材料事業全体の売上高は+40 億円増収の 3,190 億円と予想しています。機能性材料等では、11 月予想比でさらなる市況悪化の影響を見込み▲30 億減収となる 1,190 億円を予想しております。一方、電池材料については、堅調な需要と金属価格の上昇により 70 億円増収の 2,000 億円を予想しております。

7. 6 ページ セグメント別通期業績予想比較（持分法投資損益）

6 ページ中央の持分法投資損益については、5 億円刻みの丸め数字で記載しています。

持分法投資損益全体としては、+60 億円増益の 325 億円と予想しています。

ゼロ・ベルデについてはエネルギー価格等上昇の影響も受けましたが、金属価格上昇により増益。Ni 系においても金属価格上昇の影響を受け+20 億円の増益となり、持分法投資損益合計で+60 億円の増益を見込んでいます。

以 上